

駐車場の人々

「くにおー。國夫は居ねがー」

子どもにも分かるわざとらしきでおちよくって呼ぶその声に、疲れやらで目を閉じかけていた私はびくつと大きく肩を揺らした。その拍子に隣に佇んでいた鍬がかたんと軽い音をたてて揺れる。はっとして辺りを見ると、一部が黒く腐敗しかけている壁の木目があった。なんてことはない、人が見捨てた掘建小屋の室内である。それをぼつぼつと木漏れ日のように照らす、どこかの隙間(恐らく屋根のどこかが虫食い)にあつて駄目になつていたのだろう)から差し込んでくる光が、やや橙がかつている。気づかない間に随分と長居していたようだ。尻が熱を奪われてひんやりと冷えていた。それに気づいて咄嗟に少々腰を浮かすと、血流が悪くなつていたのか鈍い痺れが走つた。心なしか感覚が薄くなつて、そこだけ壊死した肉のようだった。

「おーい、國夫ー。ここかー」

足音が小屋の前で止まる。追いかけるように被さつたのは、紛れもなく父の声である。やっとそこで私は、今日が父の帰還日というのをすっかり忘れていたことに気がついた。恐らく私の行方を心配して探しに来てくれたんだろう。

もう、今のほんの一瞬で目が覚めた。私は恥ずかしさやら、理由のないムカつきやらで今すぐ走り出し逃げてしまいたい衝動をぐつとこらえた。幼心ながらに、逃げた

ら現在唯一の味方である父もきつと眉をひそめることも、自分だって本当はこれ以上事態をこじらせたいた訳ではなかったことも分かつていた。

だが久しぶりに会う父の前に自ら姿を現すのは気が引けた。なぜならば鼻水や涙でべしょべしょになつてしまった顔も、腫れ上がった目元も、すすんで見せたいものではないし、それ以前に幼い私はまだ祖母と実咲への怒りが収まっていなかったから、今出たら敗北宣言のようで嫌だったのだ。そう思うと、また悔しいのがぶり返し、やがて大きな涙がぼろりと一つだけ土間に落ちてしみを作つた。子どもの情緒は結構流動性があるものなのだ。それでもさして困らないのは子どもの特権なのだろうが。

がらがら、がんと立て付けの悪い戸を開ける気配がする。長年堪えてきた雪の重みで少々歪んだまま放置された引き戸は、この小屋がもう誰からも必要とされていないことを感じさせた。

やがて、みし、みし、と不穏な音を立てながら、手をつかなければ登れないような勾配のある階段を父が登ってくる。たまに危なっかしい、がた、だの、ぎし、だの聞こえてくるのを聞いて、まだ体重の軽い私ならばきしきし程度で済むものを、大の大人がゆっくりと上がってくるものだから、階段だつて泣きたい気持ちだろう。などと思ふ。

「くー」。居だがー。居だなら返事するー」さらに近くなつた声にもう一度びくつと肩を震わせた私は、もつと体を固くした。私としては居心地が大変悪く、もはや腹の底に溜まつた焦りや焦つたさに全身を包まれて、その煮凝りになつていた。逃げたい。逃げられない。色々な気持ちぐるぐるど台風のように渦を巻いていたが、いい加減無視するわけにもいかない。そう結論づけて、泣く泣く私が伏せた顔

の隙間から階段の方を伺うと、父が階段を登りきらずに変な姿勢で固まったままによっこりと顔を出していた。

ただでさえそれで床にめり込んでいるように見えて可笑しいのに、しかも何故か大きな目をますますぎよろりと剥いて、歯をいーっとむき出しにしながら（恐らく馬の真似だったのではないか）見渡している。それを見た瞬間の私の顔ったらなかっただろう。本当に、本当に間抜けづらをしていたと思う。

「とおさん……？」

それでも父は動かない。一瞬だけ時が止まったようだった。当惑を込めて子ども特有のやや伸ばしたような声で呟いた私は、きよとりとした後、思わず詰めていた息をぶはつと一気に吐き出し、顔をくしゃくしゃにして大笑いしてしまったのだ。一度出てしまったものは引っ込みがつかず、もう、後から後から止まらない。

今考えても別にここまで笑うことはないと思ったが、そのときの自分は無我夢中で笑っていた。なんとなくだが、「許された」と感じた。いつの間にか、あっけないほどに、逃げたいなどと言う気持ちはどこかに消えていたのだから、やはり子どもとは、特に私とは、どこまでも単純であった。

というのも私も自我が芽生え自立を欲す年齢だったが、やはり親というものはときに恐怖の対象であり、もしかしたら般若のような顔をしてすぐさま怒鳴られるかも、などと実は頭の片隅でびくびくしていたのだ。自分で隠れておいて、である。

故に、拍子抜けて、目尻にたまっていた涙がいくつかほろほろと落ちた。が、もうそれはただの心地よい塩水として土間に吸い込まれていった。私は半ば泣き笑いのようになりながら、着物の袖でぐいっと顔をまんべんなく擦った。

父がこちらを向いて、つられて照れたよ

うに笑った。それがいつものように快活としていなくてくつくつ笑いであったから、多分父にしては茶目っ気のあることをした、と内省していたのかもしれない。それから気を取り直して片手を小さく上げておいておいでをする。

「帰んべ。一気に降りっど危ねがら、俺先に行くさげて、追いかけてこいよ？」

「ん」

「んー」

すっかり笑い転げて息をふうふうしている私が「はい」と返事をせずぶつきらぼうに返したのを面白がったのか、父は同じように返した。おいでをしてしていた手で髪を雑に撫でつけて、やがて立ち上がった私を確認しその身を翻した。やがて父が階段を降りきり、私が降りる番になった。

私はなんの気なしに後ろを振り返る。ほこりがきらきらと西日で輝いて、どこまでもいつも通りだ。夏の湿った生暖かさを吸って、やっとこさ私は階段をゆっくりと下り始めた。父が見守る中、これが最後になるかもしれないという思いが、妙に哀惜を伴って胸に迫ったのを不思議と覚えている。

余談だが、この建物は私達家族のものではなく、神崎という夫婦が、知人が諸事情で家を手放すというのでそれを安く売ってもらったときに、家から若干離れた位置にある当主が持っていた畑と一緒に買ってきただけのものである。どうやら用途としては農機具をしまふ場所、生ゴミを捨てる場所、もしくは使わない家具を一旦避難させる「その他」的な場所であったらしいが神崎夫婦がどちらにも農耕をしないので畑は荒れ、それに伴うように小屋も少しずつ自然に還るかのように蔦が這って、時折上からぼろぼろと木くずが落ちてくる始末だった。せめてどこぞの誰かに貸し出し管理を頼むこと

ができたならここまで落ちぶれはしなかっただろうが、土地を争うようにして開拓が進んでいた昔と違い、今どき農家なんて流行らず若人は街に下るようになり、結果的に当主が苦勞して手に入れたであろう土地の悪いこの土地だけが残ってしまったらしい。

そんな、昼間入ってもどこか薄暗く、近づきたくもないどこにもある廢墟未滿だったがある種の「ときめき」を汲み取った当時の私にとっては、ちよつとした秘密基地だったのだ。土のなんともいえない安心する匂い。遠くでかすかに聞こえる喧騒。そんなものか、といえればそれまでだが、どれを取っても私にとっては心臓を落ち着ける大變な宝物であった。

だから神崎夫婦が存在をほとんど忘れているのをいいことに、度々ここに忍び込んで一人でいた。そんな幼き日の私の居場所には、雪の重みでとうとう潰れ、抜けた屋根が柱をペしゃんこにした状態で残っている。もう長らく見に行つたことはないが、恐らく以前よりも植物たちに侵食されて原型などとうに失つてしまつたかもしれない。私が思うに、まだ多分そこには、生意気に挑戦的な目をしている餓鬼の私が、むんつけた（拗ねた）顔をして鼻をずびずび言わせながらうずくまっているのだろう。

「もう鍬と鍬の間さ隠れんなな。危ねがら」「うん」

あの後、小屋を出てきたところをぼかつと一発だけ頭を拳で殴られて、そこがじんじんと痛んでしょうがなかった。今なにか話すとまた涙が零れそうなので、短く切つた返事をぼつりと溢す。

父の歩調は早い。私の足が痛みて遅くなっているのを見かねて、父は私をおぶつた（背負つた）のだが、優しさの中に、やはり心配した反動から来ているであろう殺伐

とした怒りが垣間見えて、私はとうとう自分が惨めな生き物であるということを認めなくてはならなかった。久しぶりに帰ってきてくれた父を囚らずも出迎えることができなかつたことが、今更だが罪悪感となつて押し寄せる。疲れているだろうに、私が走らせてしまった。先程恐る恐る見た、刈り上げられたうなじの表面が汗で湿つていたのを思い出し、尚のこと自分の思慮の甘さに嫌気が刺してきたちよつどその頃、父が口を開いた。

「あど、おめが座つてらっけとこ、ちゃあんと見だが？あれ、腐つてらっけがら俺が来ねがったら、おめ、今頃落つてらっけぞ」「えつ、んだの？」

「んだ。もういい加減ばつちや（祖母）ば困らすな。俺が居ねとき誰がおめを探すんだ？おめがもし、死んでらっけとしても誰もおめの事ば気づがねがったら、なにしました？」

私はそれを聞いて一歩一歩父の足が踏みしめる振動を直に感じながら、一人慄いていた。父にこの手の迷惑をかけたのは合計で二度目だったが、自分の「避難所」の危険性についての警告はこれが初めてだった。恐らく父なりに「これが最後だ」と婉曲に言いたかつたのだと思う。私は、ついにさつき予言じみて自身が思ったことがあえなくして現実になつてしまつたのをぼかんと、どこかで傍観していた。

父は筋肉を固くして黙り込んでしまった私を、よほど怖がらせてしまつたと思つたらしくそれ以上はそのことを掘り下げる素振りもせず、しばらく何も言つてこなかつた。

子供の足では再現できぬ速さで、まさに馬にでも乗つて歩いていくようにぐんぐんと景色が変わっていく。ここらへんになると大抵辛くなつてくる家から少し離れたと

ころにあるならだら坂も、父にすれば少し勾配のあるだけで普段の道と対して変わらない感覚なのだろう。そんな時に父は久しぶりに口を開いた。

「……んで、なしてばっちやとみさばあ(実咲)と喧嘩さなつたなや?」

明らかにこれだけは聞いておかねば、という思惑が言外に漂っている。私は内心どこで聞かれるのかどぎまぎしていたので一瞬心臓がひきつった思いがしたが、想定されたことだったのですぐに呼吸を整えることができた。一拍おいて、なるべく気丈な風を装ってことの顛末を話そうと試みる。

「みさばあ、今日も来どつたんだげっどん」

「うん」

「あんね」

「うん」

何かに例えるならば、強いて言うならば、土間の隅に立てかけてある数本のごぼうのような質素で温かいとも冷たいとも言いたいそれが、父の返事だった。

「ばっちやがな、急に」

「うん」

「みさばあのごと、分がんねって言って」

「ん?分がんね?」

聞き返す父に私はもどかしく思いながら、尚も言葉を重ねた。

「みさばあのごとがんねって。知やねって」

「なして」

「知やね。だがら聞いたら、みさばあからごしやがった(叱られた)」

「……まだ、みさばあ、家さ居だよな?」

「うん。たぶん。とおさんが着いたころも居だっけべ」

「んだ」

「んだらまだ帰ってねど思う」

「ん」

最後に父はなにか思い当たる節があったらしくふと口を閉ざした。私は物言わぬ父の後頭部をじっと、何か言ってほしくて見

ていたが、父は歩調を少し早めただけだった。今考えれば、このとき父は、私と、これからのことを思っていたのだろう。

祖母のキネは、この当時、物忘れがひどくなくなった。眼鏡や印鑑の場所が分からなくなる、なんでも同じことを聞くといった症状から始まり、最近では自分が今何をしていたのか一瞬把握ができなくなる瞬間があるのだという。それは現代で言う、まさしく認知症の初期症状であった。

当時の近隣地域では「ぼけ」の名称で通っていたが、付着していた雰囲気は精々「年寄りの物忘れ」といった意味合いが強く、現代のいわゆる「認知症」という一単語とは異なり、ややおおらかな受け止め方をされていた。が、父はこの症状がいわゆる「ぼけ」にとどまらないものであるというのを薄々勘づいていたのではないだろうか。

そこで登場するのが上記に出てきた「みさばあ」こと神崎実咲という女性である。実咲は私の「避難所」の持ち主の神崎夫婦の妻の方で、夫の都合で引っ越しを余儀なくされたわけだが、慣れない場所で近所付き合いをする中、キネと波長が合ったようであった。キネがこのようになってしまった今、母親が買い出しなどでどうしても外出する際、火の始末などで万が一があったらいけないということで急遽キネと國夫のことを短時間みてくれる人間として父が近所にかけてあったところ、真っ先に彼女が名乗り出てくれたのだ。

父は、恐らくなながあったかその全貌を息子の口から引き出すのは忍びなく、黙り込んでしまった訳だが、私が思うにその仲良しさに少々甘えすぎていたのかもしれないかった。

「実咲さん。僕です。國夫見つかりました。ご迷惑おかけしてすみません」

父が玄関を開け一声かけると、奥から弾かれたように実咲が飛び出てきた。頭上で父が咄嗟にもう一度頭を下げたのが、空気の揺れて察せられた。

私もそれに倣って慌てて頭を下げる。

ぺたぺたと平べったい足が床を踏んでくる音がし、やがて止まった。

実咲はいつも袴が裾の方できゅっと窄まっている物を着ていた。そこから覗く細い足首が、私は少し苦手だったことを思い出す。栄養不足のためか、真ん中付近でべこりと凹んだ血色の悪い十個の爪が、それらが今こちらを見ているのだ。落ち葉の虫食いのようにぼつぼつとできた茶色いしみが木肌、薄い皮膚の下に編み込まれた赤と青の血管が葉脈に見えるまで、そう時間を要さなかった。

父が私のうなじの下あたりに手を当ててもっと深く頭を下げるように促したが、私は金縛りにでもあったかのようにびたりと動けないままだった。やがてもっと強い力で頭を押されて、それでやっと深く礼をした。夏なのに、真冬の冷水のような冷たい汗が首から胸にかけて流れる。

「息子がなにか言ってしまったようで、すみませんでした」

「あ、ああ、いえ。こちらすみませんでした。……キネさん、今縁側の方で寝てらっしゃいます」

思ったより細い声に、私は張られていた糸がわずかにゆるくなったように感じ、ふっと安心して喉奥で固まった呼吸をほどこした。

もしかしたら、思っていたより悪い事態にはなっていないんじゃないか。そう、幼いゆえの短絡的思考で淡い期待を抱いてしまった私は、そのままゆうっくりと視線を上げた。が、またすぐに伏せることになる。

父のお陰で先程の勢いをにわかになつた実咲だったが私を見るに、煮込んだ黒豆の

ような小さな瞳に、もう一度なにか火のようなものがちかりと立ち上った。が、すぐに失せた。意図的に、失せられた。平たく言えば、なにか汚らしいものを見るように睨まれたのだ。

私はその一連の動作に、ぞおつとした寒気が走るのがわかった。まるで自分の背中を何人もの目が睨んでいるような、いたたまれない感覚にしばし私は絶句していた。

実咲は、父といくつか言葉を話した後、父にもう一度浅く礼をして、なにかから逃げるようにつつかけを履き、脇を通り過ぎてしまった。とうとう、彼女の方をもう一度見ることは叶わなかった。二人の話し声があったはずなのに、私の周囲はすべてが息を潜めたように静かだった。

かつかつという靴音が遠ざかる頃、はいよいよ、蝉しぐれからひぐらしの鳴き声に変わった夕暮れを背景に、一畳ほど先の地面を、目を見開いて見ることにしかできなくなっていた。呼吸が、呼吸が、苦しい。父が肩をゆさぶったのをにわかに感じたが、私の皮膚が掛け布団ほど厚くなってしまうように、ゆさぶられているとはつきり認識するのにかかる時間を催した。気づけば私は玄関を閉める父の隣でわあわあと声を上げ泣いていた。

当初の私は当たり前といえばそれまでだが、「ぼけ」がなんであるかを分かっていた。単に若い衆が日常的に使う語でもないのと、両親が言いあぐねていたのが主な理由である。だから印鑑の場所を何度も聞いてくる祖母に毎回首を傾げていた。私が疑問を投げかけることで、それがやがてキネの自問自答に変換される。そうしたらキネは思ったはずだろう。何故私は色々なことを忘れていってしまうのか。どこまで私は分からなくなるのか。底なしの不安はじわじわとキネの内面を傷つけていく。

そこで、私とキネのやりとりをじつとりと暗い目で黙殺し、いち早くキネの内面の変化に気づいていたのが実咲であった。それから展開はもうお察しだろう。そう、私の無邪気さ故の残酷さにとうとう実咲は我慢が効かなくなってしまったということだ。

実咲の怒った顔は今でもはっきり覚えてる。火にくべられた能面のようだった。

確かに実咲の気持ちは、父によく理解できた。だが、相手はまだ死の概念もよく理解できていないような子である。おこがましいことではあるが、なるべく國夫の知能の進み具合に寄り添ってほしかったというのも事実で、やはり子どもというのは大人が当然だと思っているものが分かる一歩手前の状態であると思うのだ。本当に、大人だけと一緒に生活しているとよく忘れてしまいが、俯瞰して相手を注視して言葉を選びとることが難しい。

自分の言動が思わぬところで相手の柔らかない部分に入り込み傷つけることがある。睦國も別に話が器用にできるわけじゃない。むしろ下手の部類に入ると思っている。で、反対に言うとうと人生において言葉の殺傷能力をよく知っている人間だった。

相手の心にあるかさぶたの凹凸を、爪を立て剥がそうとするなど大罪だ。それが、無意識であれども。

だから、矛盾するようであるが、実咲に思うところはあるとして、自分の息子を庇う気は睦國にあまりなかった。どんな形であれ、自分は相手を傷つけることができるのだという痛みを伴う学びは、時に宝になるというのを睦國は知っていたから。なにが良くなかったか、感覚的にいいから、実咲が言いたかったことを想ってほしかった。良い悪いではなくそのまま、見たまま、感じたままに相手のことを深く考え、然れ

ど確実な一線を引き深く干渉せず、他人の感情に振り回されないようにできる青年になれるように。

睦國は、自分が思っていることが果たして息子の教育にとって正解か分からなかった。だが、睦國が大切にしている矜持のほんのひとかけをどうするかは結局この子次第である。父は所詮信じることしかできない。

「くに。ばっちゃんはなあ、今記憶の引き出しが散らかってるんだ」

「ひきだし？」

茶の間に二人の声が反響してぼわん、と響いた。私は泣いた後特有の連続して出るしゃっくりで、ひっくひっくひっくとなっていたが、頑張って話を聞いた。正座したふくらはぎの下で、い草が熱を吸ってはぬるくなっていく。暑い日だった。

「んだ。記憶が整理整頓できてなくて、おめや、みさばあのことともぐちゃぐちゃになってる。んで……多分もう戻らんね」

「戻らんね？」

「多分な。今はちょこつとなら片付けできたらみたいだけつど、もうそれもすぐ出来ねくなる。いつか完璧に忘れるときが絶対くる。いつ、なにが分かんねくなっても、おかすぐねんだ。それはおめのこつかもしんねし、おれのこつかもしんねし、おめの母あちゃんのこつかもしんね」

「……おれのこととも忘ってしまふの？」

聞いて、その後、後悔をした。父は、私の方を見るのに一瞬躊躇したように見えた。

「……分かんね。でも、ばっちゃんの『ぼけ』は、多分もう止まんねんだ。ごめんなあ、くに」

父はそう言って私を見た。何かを諦めたような、そしてそれに慣れたことに痛みを堪えるような顔だった。

私は、もう既に爆発しそうだった。なにをしたらいいのか分からず途方に暮れ、腹の胃液が、かまされていいる(かき混ぜられている)ように混乱にも似た緊張が走る。全速力で走った後のように、喉奥が乾燥して粘液のような気持ち悪さがせり上がってきた。自分は今なにか、人生の岐路に立ったようであった。

「……くに。國夫」

父が私にそう呼びかける。

「大丈夫だ。狼狽えんな」

言葉は優しくかったが、声音のぴしゃりと父は言った。私は、咄嗟に父に「何が？」と問い詰めなかった当日を褒めたいと思う。それくらい、その時の父に私は理不尽を感じていた。

でも自分でも当時は言葉にできずともなんとなく理解していたように思う。狼狽え、泣いて済ますことなどできないのだ、と。これは、自分で抱えなければということ。誰に頼ることなく、追い続けることもなく、この出来事をなにかの折に何度も咀嚼し自問自答を繰り返さなければいけないことを。

上を見上げると父はいつも伸ばしている背筋を緩やかに曲げ、やや斜め下を向き、口こそ閉じているものの、ほうけた顔をしていた。それはまるで自分の死期を悟り、人が近づいても動かない野の獣に、数匹の蠅が健気にたかっているのを見ている気分だった。不思議と、自分に厳しいことをよく言う芯のある父が、鞠ほどに小さく丸くなって消えそうに思えた。私は、気づけば父に問いかけていた。

「……とおさんも、忘ってしまうの？」

「え」

私は下を向き父に尋ねた。しゃっくりがこの時だけ治ったのが不思議だった。「とおさんも、ばっちゃんみでになっしてしまっうの？」

私はこのとき、どうしてこんな質問をしたのだろう。でも、多分、否定の言葉が欲しかったに違いない。

「父や母が、ばっちゃんのように何も分かんなくなるかもしれない。もしかしたらばっちゃんのようにしわしわに萎んで、果てには死んでしまうかもしれない」、などということは、ないはずだと、いや、死を意識していなかったからかもしれないが、絶対に死ぬまでこの二人だけは一緒だと思いたかったのかもしれない。あえて赤裸々に語るとするならば、私は幼い時、確かに、親しい人が死ぬわけがないと確かに信じていたのだ。

やはりというべきか私の期待とは裏腹に、父は長い間何も言わなかった。きっと、私の質問の意図は十分に伝わっていたはずだ。伝わっていたから、父は答えられなかったのだ。嘘を、吐かない人だったから。信じることしかできない。息子が受け入れられることを。

沈黙が、重かった。もはや私は泣き止んで、しゃっくりも治っていた。だが、母が買い物から帰ってくる間の数十分は、二人ともくたびれて動くことが出来なかった。

人は衰え、やがて繋がりのはいつの日かふつぷりと途絶える。もしかしたらそれを知ってからが生きることの本番なのかもしれない。周りの人々が途中駅でおりていく中で、窓の方を見ずに列車が走り出すまでぎゅつと目を瞑る。そんなことを繰り返して、果たして私達は正気を保てるのだろうか。

そんなことを思っていた。随分懐かしい記憶だ。私は、足の下に汽車の規則的な振動を感じながら、窓の外をじっと見詰めていた。白い砂漠のように真っ平に雪の積もった田畑は、見ていると心が落ち着く反面、中々に感傷的な光景だ。雪が音を吸って、

どこまでも静かである。静かな砂漠を、私達を乗せた汽車が突っ切っていく。

汽車の椅子というのはどこも同じで、へたった革張りの椅子は直角に設計されているのが常だ。長く座っていれば腰を痛めそうだったが、反面人の熱を吸って随分と心地よい温度になっており、目を瞑れば直ぐにでも寝てしまいそうな雰囲気があった。実際、隣の母は私の二の腕に頭を預けて小さな寝息をたてている。くすんだ固い生地 of 喪服着物とは対照的に、視界の端に映るやや乱れた何本かの頭髮は、細く、ねずみの髭のように白いものが混じってきらきらと反射している。本人は気にしているようだったが、あまり見ないほうがいいのだから、私はその一本一本を数えた。そして十を超えるか超えないかのところでやめた。思っていたよりもたくさんあるということが分かれれば、やめる理由には十分だった。この人の安寧が続けばいい。たとえ私がいなくなろうとも。そう、心から思った。

母は、三日三晩泣いていた。私もそれに付き添った。父という存在は、そして父に限らず私達家族にとつての各々は、私達にとつてもはや季節の移ろいほど当たり前前の存在であり、従ってなくなった後の寂寥も一入だった。

父は、泣く私を叱ったことはなかった。それが私には酷く不思議だった。だから私はただぼんやりと、父がいつか泣くようなことがあったとき、私の前で泣けるように手筈を組んでいるのだという氣でいた。結局、父は私の前では死ぬその時まで泣かなかった。私は父の全てが終わって、それがただの愛であることによく氣づいた。

とおさん。私はそつと心のなかに呟いた。虚しいですね、生きるというのは。ですが大変、それでもって、中々にやめられんことです。あなたは、どうでしたか。……

どうでありましたか。とおさん。

ゆっくりと、大きく息を吐くように電車が停止する。やがて扉が開き、真っ白い雪の粒が氣流の変化で列車内に入り込んできた。私の頬をいくつか掠め、凜とした冷たさを残すそれは、茶化すように一瞬で溶けてしまった。自分の体温とその他のがくつきりと、先程よりいくらか冷えた箱の中にぼんやり浮かび上がる。さむい、さむいねと言ひ合う声ですら、ほのあたたかい。私は一人、笑った。この人混みの中に父がいる氣がした。通夜で頭がやられていたのかもしれない。でも、その時はきつといると思った。

ああ、そうですね。きつとそうだ。

終点までは、まだ遠い。